

担当：阿部小涼（あべこすず）
法文研究棟 331 室
課題提出：kosuzu@eve.u-ryukyu.ac.jp

お知らせ

▼シンポジウム「来るべき自己決定権のためにー沖縄・憲法・アジア」
主催：5・18シンポジウム実行委員会（チームデルタ、前島夜塾、沖縄文化講座）
5月18日（日）13：00～21：00
沖縄県立美術館講堂（那覇市おもろまち 3-1-1 TEL098-941-8200）

▼大学キャンパスでセクハラに対抗する方法を考える打ち合わせ会
5月21日（水）20：00より
栄町市場内、おきなわ時間
マップ(pdf)
<http://maejimaac.net/data/sakaemachimap.pdf>

▼アレイダ・ゲバラ講演会
5月24日（土）14：00-16：00
パレット市民劇場
問い合わせ：アレイダ・ゲバラさん招聘実行委員会
098-865-2155
<http://www.atenajapan.com/news/pdf/aleida03.pdf>

▼辺野古座り込み 1500 日集会
日時：5月25日日曜日、午前11時から
場所：辺野古の浜（雨天の場合、瀬嵩の久志支所ホール）
山羊汁、牛汁、タコの刺身など有り。また、汀間漁港から大浦湾体験ツアーも予定。（食事、ツアー参加有料）
http://henoko.jp/fromhenoko/2008/05/10_001510.html

<コモンズ>

(5) アヴァン・ガーデニングからバス乗客ユニオンまで：自律空間の形成とコモンの創出

■アヴァン・ガーデニング(Avant Gardening)

- The Garden of Eden an Adam Purple creation New York City
<http://jp.youtube.com/watch?v=BygHjTKqz7c>
- Rats to Roses - Sierra Club Chronicles
<http://jp.youtube.com/watch?v=Qrh5BUXxYMc>
- Jenny's Garden
<http://jp.youtube.com/watch?v=UHGQxkdhf5Q>
- Bronx Community Garden Gets Facelift
<http://jp.youtube.com/watch?v=GMXX4i4Myes>

▼ゲッターの荒廃に興った自律空間から、ジェントリフィケーションに抗する運動へ

1973年、リズ・クリスティーを中心としたグリーン・ゲリラ(the Green Guerillas)が、巨大な錠切り鉄とつるはしをもって、バワリーとハウストンの交差点近くの封鎖された空き地に侵入し庭を造り始める。この界限はアルコール中毒者系ホームレス人口がひしめく地区で、この敷地内では冬は凍死者が続出していた。彼女らは自らを「風景の解放軍」と規定し、そのような悪場所を「庭=運動」（アヴァン・ガーデニング）の出発点とした。彼女らは、この敷地を整備する許可を市に申請していたが、逆に「不法侵入」とみなされ、退去を勧告された。そこで新聞/テレビなどのメディアを導入し、廃墟から庭への転換をまざまざと大衆に披露するという広報戦術によって反撃した。その結果、市は姿勢を変え、1974年にこの土地を借地することに合意する。

この勝利が他の「庭=運動」（アヴァン・ガーデニング）の勃興を促した。「緑のゲリラ」たちは「庭=運動」（アヴァン・ガーデニング）の訓練コースを設置し電話相談を受け付ける。彼女らは、ニューヨーク5区全体の封鎖された空き地、ハイウェイ脇、道路間の空き地などに「緑の種蒔き=救援物資(Seed Green Aids)」つまり草炭、肥料、野生の花の種などが入った風船やクリスマス用の装飾ボールなどを投げ入れていった。

1970年代後半には「庭=運動」（アヴァン・ガーデニング）が、様々なコミュニティ運動の触媒となった。これを出発点に活動家たちは、地元の居住空間や学校を修復し、イベント・スペースを造り、自律空間を構

築していった。ことにロウアー・イースト・サイドでは「庭=運動」(アヴァン・ガーデニング)は勃興しつつあった「スクワット運動」を組織化し、それと同時に発展していた。1970年代初頭に公民権運動を闘った活動家サラ・ファーレーが、LAND(Local Action for Neighborhood Development)を設立し、自力更生による住居とコミュニティ空間の生産を目指した。[中略]

1996年、市の住宅/保管/開発局(Department of Housing, Preservation, and Development=HPD)は、次期5年以内に、市中に散在する800の庭の半数の敷地を開発の手にゆだねることを発表する。その口実は、そもそも住宅地だった敷地にできた庭を除去して、住民に「手ごろな(affordable)」住宅を建設するため、ということだった。これは「文化的伐採(culture clear-cutting)」と呼ばれる行為、つまり当地に現に住む住民を、より豊かな住民にすげ替えること、つまり一階級の他階級へのすげ替え、あるいはより直裁に言って、ラテン系住民の白人系へのすげ替え計画にほかならなかった。1997年12月30日、幾多の庭が取り払われる。それに対してThe Lower East Side Collectiveが結成され、数々の抗議デモや市と開発業者へのファックス攻撃(fax jams)を行う。1998年1月「庭=活動家」のグループが、ジュリアーニ市長の第二期就任式に潜入し式の妨害を図る。1998年6月、いくつもの「小さな家(casita)」式庭園を売ろうとする競売場に、何万匹ものコオロギが放たれる。庭師ならでの市民的不服従行動(シビル・ディスオビディエンス)であった。1999年当時、市内にはまだ700ほど庭が残っていた。その後、この中の60ほどは「緑の親指(Green Thumb)」プログラムによって公認されたが、その他は次第に地所の私有化によって破壊されていった。

かくしてニューヨークの「スクワット」および「庭=運動」(アヴァン・ガーデニング)は「それ自体」として活発な活動に次期を終えた。その活動形態は20世紀後期のニューヨークにおける「都市空間において自律を目指す民衆の闘争」の強固で豊かな母系となった。まさに「一夜建ての家」の伝説を引き継ぐものとして、それは「相互扶助的共同作業」のモデルを提供した。そこでは「日の生産」「食物の資産」「居住空間の生産」「コミュニティ空間の生産」等々、全てが「共同作業」そして「直接行動」として実践された。また「庭=運動」(アヴァン・ガーデニング)は、人種と民族性によって分断された近隣空間において、複数民族的(マルチエスニック)な交流を形成する契機となった。その意味で、それはイースト・ヴィレッジの文化シーンを下から支えていた。¹

▼ロウアー・イースト・サイド=ロイサイダの固有性

■Brad Will, Loaisaida

<http://jp.youtube.com/watch?v=ob-k5sPb5U4>

-ピーター・ランボーン・ウィルソン(ハキム・ベイ)「アヴァン・ガーデニング」『VOL』01(2006)以文社。

-トシダ・ミツオ「NYコミュニティガーデン盛衰史」『VOL』01(2006)以文社。

■バス乗客組合(Bus Riders Union: BRU)

<http://www.busridersunion.org/engli/index.html>

-1991年、ロスアンジェルス港湾地区の大気汚染問題に取り組むキャンペーンの中から展開。

-労働/コミュニティ戦略センターによるバックアップ

<http://www.thestrategycenter.org/>

<http://jp.youtube.com/user/TheStrategyCenter>

-1994年、MTAを提訴

-BRU、戦略センター、南部キリスト教指導者会議、コリアン移民労働者の権利擁護団体(the Southern Christian Leadership Conference and the Korean Immigrant Workers' Advocates)を共同の原告団とし、全米黒人地位向上協会(National Association for the Advancement of Colored People)から法律面の専門的支援を得る

-35万人のバス乗客を代表する「集団訴訟」

-バス運賃の1.10ドルから1.35ドルへの引き上げ、月42ドルで乗り放題だったマンスリー・パスの廃止、ブルー・ライン通勤路線のゾーン・システム導入の差し止めを要求

-MTAの方針は1964年公民権法第6篇「連邦の資金援助を受ける事業、活動のもとで、人種、肌の色、出身国を理由に、参加を妨げられたり、利益享受を否定されたり、差別されてはならない」に違反していると主張

-一時差し止め命令、和解が成立するまでの六ヶ月のあいだの運賃凍結、MTAは25セントの一律値上げと引き替えに、49ドルでマンスリー・パスを継続することに合意。



この数年のなかで、戦略センターのもっとも重要なキャンペーンは、「バス乗客組合(Bus Riders Union BRU)」である。これは多人種的な組織で、交通機関に依存している労働者たちが、公共交通機関における人種・階級の不平等に対して、宣戦布告したものだ。BRUは、しかし、シングル・イシューを標榜するグループではなかった。とりわけ資本逃避や脱工業化によって打ちのめされた都市の経済的・物質的な安寧に

¹ 高祖岩三郎「庭=運動(アヴァン・ガーデニング)以降」『VOL』01(2006年5月)以文社 pp.129-130.

とって不可欠な都市交通機関において、公共サービスの公正性を求める闘争は、非白人からなる労働者階級の運動であった。かれらの生き残りは、スリム化や予算削減、人種主義の強化、外国人排斥、貧困者への冷淡な態度などが支配する時代のなかで審問にかけられていたのである。公共交通機関は人種・エスニック・ジェンダーの区切りを横断して、多くの都市労働者たちの生活に触れる希有な 이슈の一つだ。そして究極的には、まかなえる程度の金額の交通機関に平等にアクセスできることは、雇用機会への平等なアクセスにつながる。製造工業とその他の中から高程度の賃金水準の仕事が、環状に広がる郊外や工業団地に移転している現状では、とりわけそう言える。運賃の上昇と運行サービスの制限のために、労働者は通勤出来るという可能性を著しく奪われている。交通費は、多くの家庭で毎月必要な家計の大きな部分を占めている。ロサンジェルス平均的労働者階級の通勤者は、仕事、家族の交流、病院、買い物などでひと月に 60 から 80 回バスを利用する。交通機関に依存しながら賃金を得ている人にとって、バス運賃は、場合によっては全収入の四分の一かそれ以上を占めることだってあり得るのだ。わずかな運賃の値上げでも、多くの貧しい人々にとっては、乗るのを禁止されたも同然ということになる。家族に会いに行く回数も減るし、食料品店で買い物もおあずけ、いやバス代が無ければ、仕事を失いさえするのだ。高い運賃によって低収入者がバスに乗れないようになれば、ロサンジェルス郡都市交通局 (MTA) は、都市の貧しい人々を輸送するという事業から撤退することになる。²

- 『アオラ／ナウ！』英西 2 言語で機関誌を出版

<http://www.ahoranow.org/>

- コーナーストーン・シアターとのコラボでバスをゲリラ・シアターに

<http://www.cornerstonetheater.org/>

Erica Kohl, "Organizing and Theater: Bus Riders Union,"
Community Arts Network (February 2001) (右画像も)

[http://www.communityarts.net/~commarts/readingroom/archivefiles/2001/02/organizing_and.php]



▼BRU の現在

■ Los Angeles Youth Organize Black, Latino, Asian Working Class

[<http://jp.youtube.com/watch?v=IeVc0KIC-r8j>]

■ 3/15/08 Hollywood Anti-War Protest: Bus Riders Union Music

[<http://jp.youtube.com/watch?v=hSjIOkqPkPA>]

■ 多少の理論的な説明

▼アウトノミアの継承

さらに 76 年にスクウォッティングは、住宅問題への対応というだけでなく政治的、文化的センターとしての意味を帯び、不法占拠は増え続ける。77 年にはミラノの「若者調整グループ」は次のような声明をあげた。「われわれは家族とは異なる生を営みたい。われわれが思うがまま生きたい」と。スクウォッティングは、このようにコミュニティへの指向性をもっていたのであり、そのために、そこでは従来は政治運動の周縁的存在であり、またそれ以前にポジティブなアイデンティティを剥奪されていた女性やゲイたちのオルタナティブな共同性構築のための自律的空間、実験場となったのだった。68 年に端を発するこのような主要には文化的アイデンティティや表現のレベルでの動きが、イタリアの 68 年以來の長期にわたる議会外の既存の左翼組織も包摂する自律を志向した運動の諸潮流 (〈運動〉という固有名詞で呼ばれた) において——主体も立場もさまざまなグループからなる横断的動きとしての〈アウトノミア〉——目立ってあらわれたのは 76 年とされている。長続きしない多様な小集団、マニフェストの数々、自発的値引き、山猫スト、そして機動隊との衝突、テロリズム。文化的創造性を志向する勢力、より政治的指向性を有する勢力、あるいは直接軍事行動を指向する勢力などが混在して、またひとつの勢力のなかでもこうした相容れない諸要素が混在して、その熱気が最高潮に達したのは 77 年のことである。³

▼TAZ (Temporally Autonomous Zone) 一時的自律空間

→ハキム・ベイ 『T・A・Z: 一時的自律ゾーン』

[<http://www.hermetic.com/bey/index.html>]

- 権力から解放された自由空間だが、固定化されたり永続化すると権力に取り込まれてしまう。

- 常に一時的でほかの場所に移動する。権力の側からは捉えることも記述することもできない

² ロビン・D・G・ケリー著『ゲッターを捏造する：アメリカにおける都市危機の表象』彩流社 2007 年。

³ 酒井隆史『自由論：現在性の系譜学』青土社 2001 年、pp.19-20。

手短に言えば、我々は TAZ のことを、それだけで一つの全面的な目的であると宣言してはいないし、他の組織の形態、戦術、そして目標と置き換えようとしてもいない。我々がそれを推奨するのは、それが、暴力と殉教へ導かれる必要のない反乱と一体になった高揚の質を与えてくれるからである。TAZ は、国家とは直接的に交戦しない反乱のようなものであり、(国土の、時間の、あるいはイマジネーションの) ある領域を解放するゲリラ作戦であり、それから、「国家」がそれを押しつぶすことができる<前に>、それはどこか他の場所で/他の時に再び立ち現れるため、自ら消滅するのである。「国家」が、第一にまず実体よりも「シミュレーション」の方に関心を持つために、TAZ はこれらの領域を不法に「占有」し、相対的な平和のうちに、束の間、その陽気な目的を遂行する。おそらく、ある種の小規模な TAZ がいままで命を長らえてきたのは、山奥の小領域のようにそれらが目立たなかったからであろう---それらが決して「スペクタクル」とは関わらず、決して現実の生活の外部へは現れなかったので、「シミュレーション」のスパイの眼には見えなかったからである。

「バビロン」は、抽象的なものをリアリティと見誤る。そして、まさにこの誤りの縁の<中にこそ>、TAZ は存在し得るのだ。TAZ を開始することは暴力と自衛の戦術を伴うだろうが、しかし、その最も偉大な強さは、その不可視性にこそある。---「歴史」がその定義を持たないために、「国家」はそれを認識できないのである。TAZ が名付けられる(表現される、あるいはメディアによって媒介される)や否や、中空の外皮を残してそれは消滅しなければならないし、消滅する<だろう>が、それは単にどこか他の場で再び飛び上がるためであって、「スペクタクル」の用語では定義できないために、それはもう一度不可視となるのである。TAZ はそれゆえ、「国家」が常に、どこにでも存在し、全納でありながら、しかし同時にひび割れと空虚だらけであるような時代にとっての完璧な戦術なのだ。⁴

■次回は (5月23日は体育祭のため休講)
5月30日(6) スペクタクルに抗する落書き

※リアクションペーパー (2)

沖縄県内で起こっている<コモンズ>を意識した社会運動や NPO 等組織、あるいはハキム・ベイ的 TAZ の事例を探して報告せよ。

※リアクションペーパー提出方法について (以下のいずれかで)

-5月30日4限の講義終了時に手渡し。

-5月30日深夜24:00までにメール添付

宛先✉ kosuzu@eve.u-ryukyu.ac.jp

※リアクションペーパーのガイドライン

-形式は基本的には自由とします。

-観察か、参加か、はたまた参与観察なのか。いずれにしても「現場」

に居合わせることを重視します。

-分量は A4 用紙で 1 枚程度までを目安とします。シンプルなものだよという意味で。

-映像・画像資料添付などヴィジュアル的工夫は歓迎されます。



[<コモンズ>たとえばこんな参考文献]

ロビン・D・G・ケリー著、村田勝幸・阿部小涼訳『ゲッターを捏造する：アメリカにおける都市危機の表象』彩流社 2007 年。

高祖岩三郎『ニューヨーク烈伝：闘う世界民衆の都市空間』青土社 2006 年。

ハキム・ベイ著、箕輪裕訳『T・A・Z：一時的自律ゾーン』インパクト出版界 1997 年。

Eric Mann, "A Race Struggle, a Class Struggle, a Women's Struggle All at Once: Organizing on the Buses of L.A.," *Socialist Register 2001, Working Classes Global Realities*, eds. Panitch et al., 2001, Monthly Review Press, available on the website [http://www.thestrategycenter.org/polanalysis-ericmann3.html].

Benjamin Shepard and Ronald Hyduk eds., *From ACT UP to the WTO: Urban Protest and Community Building in the Era of Globalization* (Verso, 2002).

酒井隆史『自由論：現在性の系譜学』青土社 2001 年、pp.19-20。

『VOL』01 (2006 年 5 月) 以文社。

⁴ ハキム・ベイ著、箕輪裕訳『T・A・Z：一時的自律ゾーン』インパクト出版界 1997 年、pp.196-97.